絵本・絵雑誌について

武井武雄氏をお訪ねして

童画の位置づけとともに、絵本・絵雑誌の新分野が確立されたのが大正に入ってからのことである。その当時から、この道におはいりになり、今なお、新しい感覚のもとに御活躍なさっている武井武雄氏をお訪ねしました。子どもがくいいるようにみいってしまう絵の魅力はどこにあるのか、その高く評価される童画の芸術性はどこから生れるのかを知りたく、また氏の存在から歴史的流れをもひもときたく、いろいろと、お話しをしていただきました。

絵本の今昔

ごぞんじのように今から一万五千年ほど以前と推定される原始の時代に北スペインのアルタミーラや南フランス・ドルドーニュー地方のラスコーの丘の洞窟などの壁にいきいきと描かれたウシ・ウマ・シカなどの壁画のたぐい――子どもにみせるという意図があったかどうかはわからない――が、絵と子どもとのつながりがあった、はじめてのものと考えられる。

日本では、藤原時代に、ごく一部の都の貴族・富豪だけにめぐまれたものとして、絵巻物があった。見る、知る、おぼえるというような知識に結びつけるものとしてつくられたらしい。必ずしも、子どもを意識してかかれたかは疑問である。そしてこれは、一般庶民には全く関係のないものであった。

徳川期に入り、木版ずりの浮世絵がわずかにでたが、伝承され、広まる可能性のある童謡や民話とちがい、子どもにふれるものが、ごく少数であったため童画としては進歩しなかった。徳川末期、子どもへの絵だけに一生を終えた国芳の門下、芳藤という人がいる。「ねこのさかなや」とか「ねこのふろや」など戯画的なものをかいたが、心にうったえるものや人生観、理想がなく、児童文化に貢献するほどの意義をもたなかった。まだ錦絵である。

明治に入り、印刷術の進歩とともに、出版が一般化してくる。日本の国には、戦争があると――当時の戦争は、国内にはほとんどの影響をあたえない――戦記ものをかいたり、号外をだしたりするた

め、高単位の部数をいちどきに必要としたので、印刷術が急激に進歩するというおもしろい現象があった。戦争が終ると読者を確保しておくために平和出版へ目がむけられ、婦人・少年・家庭の雑誌がでまわるといったぐあいである。

当時、四大幼年雑誌といわれるものに「幼年世界」「幼年の友」「子どもの友」「日本幼年」があった。ここではじめて『子どものもの』という意識が生れてきた。しかし、これらに執筆する専門の画家がいないため、将来美術家といわれうる可能性をもった人たちのアルバイトか製版職工のかた手間仕事に負ったため、絵はうまいけれども、また技術はすぐれているけれども、心にうったえる何ものもなかった。つまり、子どもの世界に入っていける、人のたましいをゆさぶる絵がなかったわけである。

大正期に入り、鈴木三重吉が、子どもに安心して与えられるようないい本をと童話誌「赤い鳥」（大正七年）を創刊した。ここらで、児童文学の確立というものが、表面だってきた。

絵もまたこれに匹敵するような考え方の人がでてきた。岡本帰一、清水良雄、川上四郎、村山知義、初山滋、武井武雄等でそれぞれ「金の星」「赤い鳥」「童話」「おとぎの世界」など別々に仕事をしていた。

彼らは子どもの存在価値を高く評価し、子どもの心に入りこんでいく、たましいをゆさぶる絵を目的にかきはじめた。このころ「子どものための画を一義的な態度でかいたもの」からを童画と呼びだす。つまり、こうした人たちの努力により、童画の位置が定まったわけである。大正のその間はこのジャンルのルネッサンスといわれるほどであった。

一方日本童画協会というものができ、また東京社では、日本でも、アメリカの「ザ・ムーン」誌のような本をつくろうと、大正十一年正月号から「コドモノクニ」が創刊された。ここにのったものは寺でも絵でも情操的な芸術性のレベルの高いものであった。

また幼稚園保育所が教育界の草わけとして認められつつあった当時、施設専門の図解的な知性にうったえる観察絵本として、キンダーブック（昭和五年）がでた。大正末期から昭和にかけて絵雑誌がいくつかでたが、それぞれに使命が分化されており、また両立する意義が大いにあった。それらが今次の戦争をさかいに整備統合させられてしまった。

戦後の絵本は分化された独自のものはなくなり、一冊でことたりてしまう一律的なものが多くでた。これらは発行部数の多いもの、うれるものの方向へ、必然的に移行していく傾向があり、一冊かえばよいという風潮ができあがってしまったのである。

絵本・絵雑誌とは

○絵本の要素

キンダーブック初期のような図解的に物質の観察を目的とするときに――観察にうったえるものは絵ではなく、図に属するもので個性が入ってはならず、常に客観的で、だれがみてもそのものずばりの普遍的なものでなければならない――本物・実物におとる弱さがあり、おのずからいきづまってしまう。これもひとつの要素として

は必要である。そしてもう一方として、感情にうったえ、情操を育てる美も大切な要素として存在する。これはみる人のたましいまでくいこんでいく作者の精神が、個性となって反映するものである。大きくわければ技術と芸術のちがいのようなものであろう。

○夢と現実の問題

ここで底を流れるものを考えてみる場合、現実論者と夢想論者の両極端をあげねばなるまい。

前者はこのせちがらい時代にあまい夢ばかりみさせておいてはいけない。どんな事実にぶつかってもくじけないような強い現実感を植えつけなければならないという論。後者は、あいもそっけもないこの世界に豊かな感情や夢を育てなければという論。両者のどちらか一方に片よってはいけないのであり、かねあいがうまくいかなければならない。ここで絵本と深い関係のある夢をもう少しほりさげてみよう。夢には健康的なものと病的なものとがあるだろう。前者は、人間の本質的な願望・要求から生まれてくる建設的なもので、(とりのように空をとんでみたいなど)うまく科学する心に結びつく可能性のあるものであり、後者は人生を否定したり、からまわりしたり、ごく瞬間的な悦楽にすぎないといったものである。前者の建設的な夢を育てることは非常に大切なことだと思う。くふうしたり考えたりして、現実と結びつける糸口が多いからであり、発明・発見、文学・芸術に至る可能性を含んでいるからである。

○つくる時の雑感

絵や絵本を大人が子どもに高いところから与えるといった態度ではいけないと思う。私がかねがね心に思っていたことを倉橋惣三氏が教育者の立場からこんなふうにいわれた。「子どもの教育は、おしえようと思ってはだめで、子どもの中に生活し、子どもになりきって遊び、その中で何かを見出していくべきだ」と……

自分のかきたいものを登場人物の気持ちになりきって、楽しんだり、感動したりする態度を大切にしたい。はらがたっている子の絵なら、自分のおでこを柱にぶつけて「ちくしょう!」と思ったその表情を素直にとらえてみたり、とぶとりをかく時でも、実物を観察するのではなく、自分が空をとんだらと考えてみる。……というように、できるだけ登場人物になりきってかくということで、心境をまずつくることに努力するわけである。

○動物の擬人化の問題

幼児向きの絵本には、動物が、あたかも人間の心をもっているごとく描かれている場合が多い。子どもとは、自分よりも目下のもの、自分よりもへぼいものをかわいがるというところがある。近親感をもたせる意味で動物にたくし人間の精神を表わすもので、子どもにとってはその矛盾が感じられないばかりか動物を愛する気持ちまでいくのである。着物を着ているだけの動物は決して擬人化ではない。裸でも人の心をもった動物を表現することが即ち擬人化である。

× × ×

さいごに外国の状況や絵の指導、いろいろな新しい技法をも研究され、お話し下さいましたが、紙面の都合で、伝えきれなかったことをおわびいたします。

(T)